

学徒勤労働員と東南海地震

長久手市氏神前 永田 宏さん

当時、私は知多郡八幡町（現在の知多市）に住んでいて、家族構成は、父、母、私と弟2人であった。

昭和19年4月、（旧制）中学5年生になった即日、半田市内にあった航空機製作の軍需工場で働くことになった。機体を組み立てるリベットを打つエアハンマーの響き、ガス溶接の埃と臭い、工場全体から湧き上がる騒音の中に、教科書も授業もどこかに吹っ飛んでしまった1年5か月の始まりであった。

一般工員、我々動員学徒（男女）、徴用工員、女子挺身隊員らが混然一体となって「1機でも多く」を合言葉に頑張っていた。学徒は、県内はもとより、遠く京都、福井、山梨、香川、高知、鹿児島などの各府県からも来ていた。休日は、月に2日、支給されたのは南京袋みたいなスカスカの作業服1着だけ、勿論冷暖房などはない。よく夏バテもせず、風邪もひかず保っていたと思う。若さと気が張っていたからであろう。

勤労働員中、忘れ難いのは同年12月7日午後発生 of 東南海地震である。職場で激しい揺れに気付き、慌てて建物の外へ逃れた直後、土煙をあげて屋根が崩れ落ちた。一瞬の間であった。工場は埋立地に建てられた煉瓦造りの元紡績工場であった。煉瓦が崩れ落ちて多くの工員や学徒が犠牲になった。生死は紙一重、全く運不運という事を痛感した。

8月15日、終戦の放送は工場で聞いた。ソ連も参戦したし、頑張れ、という放送かと思っていたら、天皇陛下のかん高い悲痛な感じの声にとまどった。「(四国ノ) 共同宣言ヲ受諾」で、「ポツダム宣言」の事かと思い出し、それを「受諾」とは、と頭が混乱している間にも放送は進み、「堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ヒ」が聞こえ、「アア、負けたのだ。」と悟った。その夜は、宿舎の窓を開け放し、電灯の覆いを外して、明るさを満喫した。

この数か月、御先真っ暗の閉塞感から俄かに解放されてホッと一息つき、なんとか生きのびる事ができた、とひそかに安堵したのであった。